

地域の美術や美術文化との出会いを作る 学習支援プログラムの工夫

— 美術館鑑賞教材「ニシムイ」の開発と中学校鑑賞授業の連携・協働を通して —

The alternative approach of the education support program providing opportunity to learn local art history and culture : Practice of developing educational materials, Nishimui, and cooperating with teaching art appreciation in the junior high school.

富原 圭子 TOMIHARA Keiko

Public facilities, such as museums, are required to create the foundation to support the cultural activities of children to realize the Next Generation School and Region Creation Plan issued by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology on January 2016. To strengthen the abilities of children who have dreams and the hopes for the future of the region, households, schools, and those who have a strong vigor for surviving society, identifying regional talent, and utilizing regional resources are considered mandatory.

As a person in charge of promoting education at the Okinawa Prefectural Museum and Art Museum and who was sent from the junior high school, I try to take advantage of the good points of the museum. Specifically, I aim to create programs that can provide opportunities for children to encounter art and culture and that can provide cultural and art resources as educational materials in cooperation with schools.

In view of these facts, it is necessary to utilize the educational resources owned by the Okinawa Prefectural Museum and Art Museum to the maximum taking into the account the demands of the current times.

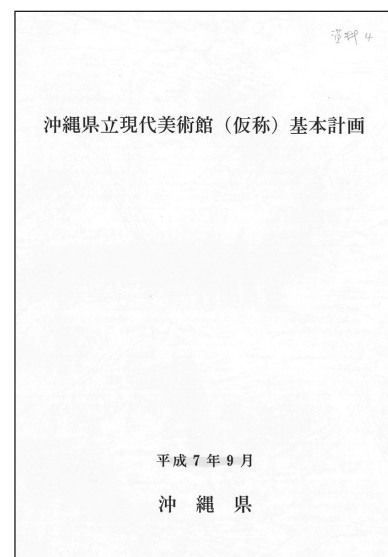
We have developed new art appreciation programs by focusing on the collection of painters from Nishimui Art Village who led the art field in the post-World War II days, as well as promoting them as materials for art education in junior high schools, and have conducted practical research on school tie-up plans.

We would like to further continue all of the above to proactively educate the region, households, and schools.

研究の要旨

当館の教育普及活動の主な活動項目は「鑑賞活動の支援」「学校支援」「実技体験の支援」の3つのプログラムで構成されている。筆者は、これまで県内外の関係施設を見学したり、業務に関する研修に参加するなどして、自身の知見を広げつつ、手探りではあるが美術館でできる教育普及事業の形を模索してきた。

前提として、当館開館（2007年）前の「沖縄県立現代美術館基本計画」¹に、学校との連携について、「美術館が体験を重視した多彩な教育普及活動を推進するため、学校教育との連携を図り、美術教育現場での館収蔵作品の活用や館職員の協力を積極的に行う」ことが提示されている。また、平成29・30年度改訂学習指導要領²では、授業のあり方を考え、授業改善を推進する視点から、「地域の図書館や博物館、美術館、劇場、音楽堂等の施設の活用を積極的に図り、資料を活用した情報の収集や鑑賞等の学習活動を充実すること」が、授業改善のための配慮事項として「総則」の中で明示された。美術館、学校の役割として、一層の連携・協働



1. 『沖縄県立現代美術館基本計画』
1995年9月沖縄県、8頁

が必要とされている。

当館が開館して12年目を迎える今、学校現場での鑑賞活動の促進とともに、学校団体からの鑑賞希望が年を追うごとに増加している。当館の「学校支援事業」は、子どもの学びに博物館・美術館の持つ豊富な教育資源を活用し、特に本物と対峙する体験を通して学習効果を高めることをねらいとしており、博物館・美術館等の活用によって、生涯学習の基礎を身に付けることが期待される。

一方、学校現場のメリットは、地域の様々な資源を授業で取り入れることで、学校の外にあるものや人とのかかわりが生まれ、学びを深める貴重な機会となる。美術館が生涯学習の場となるためにも、学校が美術教育を充実させるためにも、美術館と学校の連携は意味を持つと考えられる。

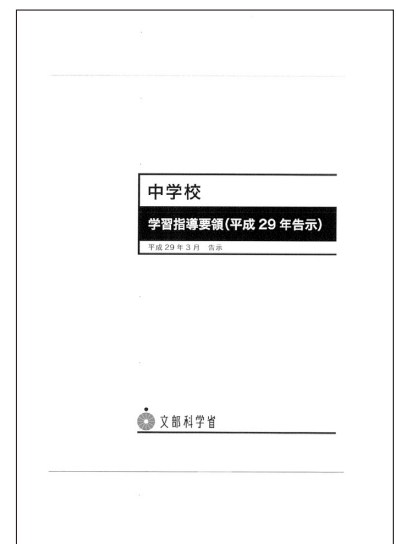
そこで、その重要性を踏まえたうえで調査・研究を試み、美術作品を楽しんでもらうことを前提として、知識理解、思考力、判断力、表現力、コミュニケーション能力、学びに向かう力等、新学習指導要領の目的を共有しながら、学校とは異なる当館ならではの体験を提供するプログラム作成を図りたい。

このことから、特に当館が収蔵している戦後間もない時代に活躍していた「ニシムイ美術村」の画家たちに目を向け、新たな美術館鑑賞プログラムの開発と、中学校美術教育の鑑賞授業の教材化を進めるときに、複数の中学校をモデル校として学校連携プログラムの実践として調査・研究を行ってきた。

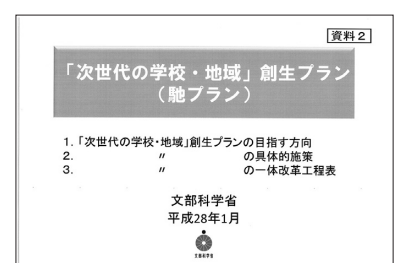
はじめに

筆者は2年前に中学校現場から沖縄県立博物館・美術館に赴任し、教育普及という立場で現在の仕事に専念している。「次世代の学校・地域創生プラン」(2016年1月文部科学大臣決定)³の実現に向けて、美術館・博物館には、子どもたちの文化活動を支援する拠点としての役割が期待されている。子どもたちが地域・家庭・学校の中で、自分の存在意義を考え、未来への夢や希望をいだき、力強く社会を生き抜いていく力を培うためには、各教科の連携、地域人材の発掘と協力、地域素材の活用は欠かせない。それらが繋がり合うことで教育の充実、未来を担う人材の育成が図られる。

このことから、時代の要請に応えつつ、地域・家庭・学校に積極的に働きかけ、沖縄県立博物館・美術館が所有する教育的資源を最大限に活用することが必要であると考えた。



2. 『学習指導要領』平成29年告示 文部科学省「総則」



3. 「次世代の学校・地域創生プラン 2016年1月文部科学省

1. 主題設定の理由

学習指導要領の理念が「社会に開かれた教育課程」であり、その実現のための3つの要点の中に「地域の人的・物的資源の活用」⁴が示されている。沖縄県立博物館・美術館が収蔵している作品もまさに地域の重要な物的資源であるとする。また、学習指導要領では、美術科の目指すこととして、「子どもたちが生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育成する」役割を重視している。さらに「美術館や博物館と連携を図り、施設や文化財などを積極的に活用すること」という文言があり、より具体的に示されている。

以上のことから、美術館・博物館の教育プログラムの地域文化資源の教育活用は、これからの学校美術教育の方向性と合致しており、文化資源の教材化、学校との連携・協働は次代の人材の育成や地域の活性化に結びつく意義ある取り組みであるとする。

美術館という場を生かし、子どもたちと美術や美術文化との出会いをいかに創出するかを考え、美術館鑑賞教材「ニシムイ」を開発した。

2. 研究の方法及び実践

2-1. 美術館と学校の現状

ここ数年当館では、小学校や特別支援学校との学校連携は深まって来ている。高校、大学との連携もあり、毎年定期的に研修会などが実施されている。しかしながら、これまでの沖縄県立博物館・美術館の「普及報告書 H24～H31」⁵によると、中学校との交流の機会は極端に少ないということがわかった。全国的な教育普及に関するアンケートでも、学校、美術館の課題が見えてきた。⁵

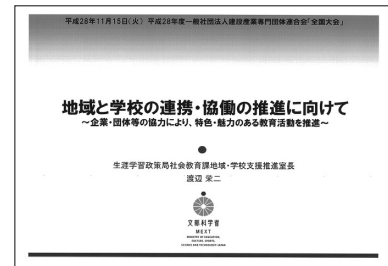
2-1-1. 学校側に関する課題⁶

- ① 多忙、時間設定、安全管理の問題 (45.1%)
- ② 美術館への引率、交通手段 (15.3%)
- ③ 事前学習不十分で作品鑑賞未消化 (3.7%)

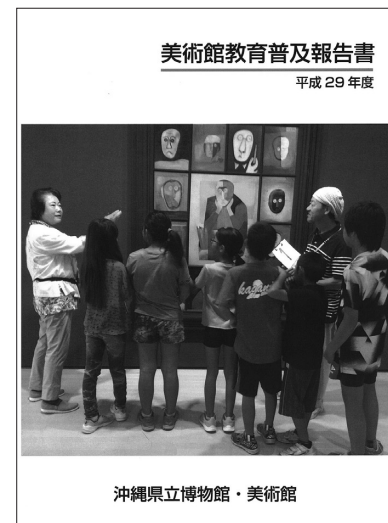
2-1-2. 美術館に関する課題⁶

- ① 子供に対応するスタッフの不足 (49.4%)
- ② 受け入れ施設が不十分 (22.7%)
- ③ 事前学習の資料の未整備 (13.0%)

以上のことから、両者の課題解決には相互補完的なかわりが、必要不可欠であることが分かった。



4. 「地域と学校連携・協働の推進に向けて」
2016年11月 文部科学省、8頁



5. 「平成29年度美術館教育普及報告書」
沖縄県立博物館・美術館

6. 『美術館・博物館の教育普及活動について』美術館・博物館に関するアンケート調査2005年
(第一生命経済研究開発室 的場康子 副主任研究員著)

ーアンケート要旨ー

- ① 教育普及機能の活性化に注目した。美術館・博物館に対するアンケート調査結果を通して、教育普及活動の実態を明らかにし、今後の美術館・博物館の方向性についての考察を行う。
- ② 美術活動は「教育」そのものだけでなく、「美術館・博物館に対する親密感」を高める効果も期待して実施されていると考えられる。
- ③ 長期的視野に立って、予算配分等、運営上の工夫を行い、教育普及活動を続けていくことこそが、将来にわたり美術館・博物館の持続可能な運営のために、必要な資源を育てることにつながるということができる。

2-2. 教材開発のねらい

鑑賞プログラム教材のねらいとして、学校教育を学校内に閉じこめず、目指すところを社会と共有しながら実現させる。そのため美術館収蔵作品（地域素材）である「ニシムイ」画家の作品を中心とした鑑賞プログラムを各学校の協力をいただき検証することにした。

2-2-1. ニシムイとは

「ニシムイ」とは、現在的那覇市首里儀保町の一角にあった丘陵。戦前は美しい琉球松が生い茂っていた。ここも、戦争により焼き払われ荒涼とした土地となった。

戦後、このニシムイで、画家たちが集い沖縄の美術復興の足がかりを示す創作活動を行ったので、「ニシムイ美術村」と称されたのである。ニシムイの画家たちは、駐留する米軍関係者の求めに応じて肖像画やクリスマスカードなどを描くことで生活の糧を得る一方、自分自身が描きたい絵、自身が追い求める絵の完成を目指して創作に励んだ。

ニシムイ美術村に集った画家には、名渡山愛順や大城皓也、山元恵一など戦前から活動する画家に加え、戦後沖縄美術界に大きな影響を与えた安次嶺金正や玉那覇正吉、安谷屋正義がいる。

ニシムイ美術村の画家は、のちに県内最大の総合美術展に発展した「沖縄展」などの展覧会開催への尽力や「創斗会」「ぴよぴよ会」の結成により、後進の指導にあたるなど精力的な活動を展開した。2015年、当館の戦後70年特別企画展「ニシムイ 太陽のキャンパス」⁷で焦点があてられた。

2-3. プログラムの流れ

2-3-1. 沖縄美術史を美術の授業で行う

終戦後の沖縄の美術界を牽引したニシムイ美術村に集った画家たちの功績を、当時の沖縄の社会の様子も学びながら理解する。学校への出前授業レクチャーでは、当館所有のティーチャーズキットの貸出しや授業の「鑑賞ワークシート」を提供する。

2-3-2. 作品鑑賞を美術館で行う

美術館に足を運ぶことにより、ニシムイの画家たちの本物の作品に触れ美術的な見方、考え方を広げる。来館の際は、長期休暇や土日祝祭日を利用して各自で美術館を訪れることとし、「ワークシート」で自主学習する。美術館の鑑賞サポートシートは学校に提出する。先生方は評価参考資料として活用もできる。



7. 戦後70年特別企画展「ニシムイ 太陽のキャンパス」のポスター



8. 「ニシムイ美術村」教材スライド 2P



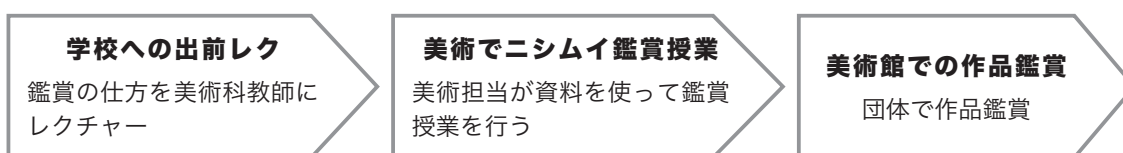
9. 「ニシムイ美術村」教材スライド 15P

●プログラム内容 ケース 1

ニシムイ鑑賞を美術の授業として位置づける。美術館団体鑑賞を活用する。時間数 2～4時間

※当館から遠距離(南部・中部・北部)にある学校の場合

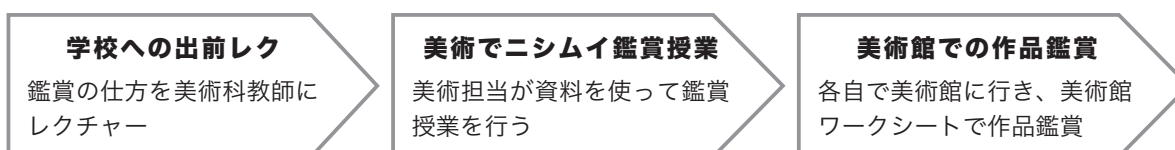
※美術館がバス(2台まで)の手配をする →年に2校



●プログラム内容 ケース 2

ニシムイ鑑賞を美術の授業として位置づける。生徒が自主的に美術館を訪れる。時間数 2時間

※美術館近辺(那覇・浦添地区)にある学校の場合



3. 事前授業用教材開発

3-1. 鑑賞教材 CD-ROM¹⁰の作成

鑑賞教材には沖縄美術史、美術館の活用方法、マナーなどの教師用指導のポイントや、作家・作品の解説等、教員が自由に編集、アレンジを行えるように CD-ROM にまとめ、すぐ使用できるようにした。

【教材内容】

- | | |
|------------|------------------|
| ◆ 画家たちの功績 | ◆ これからの沖縄の美術 |
| ◆ 美術館来館説明 | ◆ 参考資料など |
| ◆ ニシムイとは | ◆ ニシムイができるまで |
| ◆ ニシムイと米軍人 | ◆ ニシムイ 10 人の画家たち |



10. 鑑賞教材 CD-ROM

3-2. 鑑賞掲示資料の作成

「ティーチャーズキット」¹¹には、当館に収蔵するニシムイ画家の作品を作家の顔写真とともに掲載した。代表的なコレクションという観点と併せて、生徒が見て話しやすい作品を選んだ。そして掲示作品の本物を美術館で見てみたいという動機づけになるよう構成した。



11. ティーチャーズキット
鑑賞掲示資料 作家・作品紹介

3-3. ワークシートの工夫

生徒が授業で活用する「事前学習ワークシート」【資料編 2】を作成した。「教材研究する時間がない」「鑑賞の授業に不安を持っている」といった先生方の手助けとなるよう、生徒たちが沖縄美術史を学び、作品鑑賞のきっかけをつかみ、そこからさらに鑑賞を深める手助けとなるよう工夫した。

3-4. 美術館鑑賞サポートシート¹²

美術館常設展示「沖縄美術の流れ」の館内鑑賞をサポートする「美術館鑑賞サポートシート」を作成した。中学校鑑賞プログラム「ニシムイ」に連動する内容を加え、作品に親しむきっかけづくりができるように工夫している。各自が自分の視点で作品鑑賞する手助けとなるよう心がけた。来館期日を記入する枠を設け、来館時にはスタンプを押して、学校に生徒の活動の様子が伝わるように工夫した。作品と出会った生徒が、素直に感じた印象をつづったワークシートを学校に持ち帰り、相互交流を通じた鑑賞の授業を展開するなど、学校連携鑑賞支援の振り返りの一つとして、活用可能である。また、美術館来館の「振り返りシート」も作成した。



12. 美術館鑑賞サポートシート 表・裏面

3-5. 美術館案内ポスター

沖縄県立博物館・美術館の常設展示室は、県内の小中学生は開館当時から無料であることが意外に学校現場においても周知されていないため、学校向けに美術館入場無料のポスターを作成し¹³、各学校に配布した。

4. 学校と美術館の連携

直接学校に出向き、学校と美術館連携の意義や教材活用について意見交換を重ねた。



13. 美術館案内ポスター

4-1. 連携モデル校の依頼

学校側の課題でもあった交通手段のサポートとして、美術館から遠距離にある学校に対して、年に2校～3校は、美術館がバスを手配して来館してもらうことを計画した。また、美術館近辺（那覇・浦添地区）にある学校の場合は、学校車または公共交通機関を利用して来館することにした。

鑑賞 実践事例

●美術館から遠い学校(バス手配)

- 国頭村立国頭中学校
- 豊見城市立豊見城中学校
- 豊見城市立長嶺中学校
- 豊見城市立伊良波中学校

モデル校

2019/1～2019.7実施

●近隣校(自主的来館)

- 国立琉球大学附属中学校
- 沖縄県立開邦中学校
- 那覇市立神原中学校
- 那覇市立城北中学校

4-2. 教師との打ち合わせ^{14,15}

学校の美術教師に授業をしてもらうため、学校長の承諾をえて、学年主任、美術教師と授業レクチャーの日程や来館日の調整を行った。9割の生徒が初めての来館は緊張しがちである。出前授業・レクチャーを行うことにより、生徒や先生方に安心感を与え、自分の感じたことをしっかり発表できる雰囲気を作ることで、当日の鑑賞プログラムがスムーズに流れるのである。

4-3. 授業実践^{16,17}

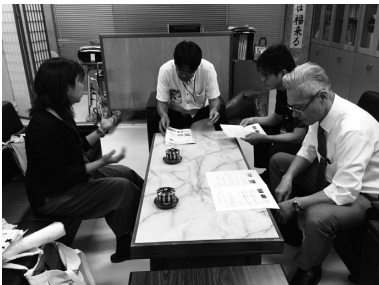
開邦中学校、宜野座中学校は CD-ROM のパワーポイント教材を利用し、授業を展開した。美術館コレクションギャラリー3で展示している「沖縄美術の流れ」の「ニシムイ美術」で画家と米軍人との友情関係や、画家たちの功績を主に紹介した。「鑑賞サポートシート」の活用法、美術館来館時のマナーを丁寧に指導していた。

学 校 名 沖縄県立開邦中学校 1 年生
実 施 日 5 月 31 日（金） 10:20 ～ 11:20
実施内容 ①終戦後の沖縄の美術史
②美術館鑑賞のマナー
③鑑賞サポートシートの活用法

学 校 名 宜野座村立宜野座中学校 3 年生
実 施 日 7 月 3 日（水） 9:45 ～ 10:35
実施内容 県立開邦中学校に同じ



14. 国頭中学校でのレクチャー



15. 城北中学校での連携依頼の訪問



16. 宜野座中学校でのニシムイ鑑賞授業

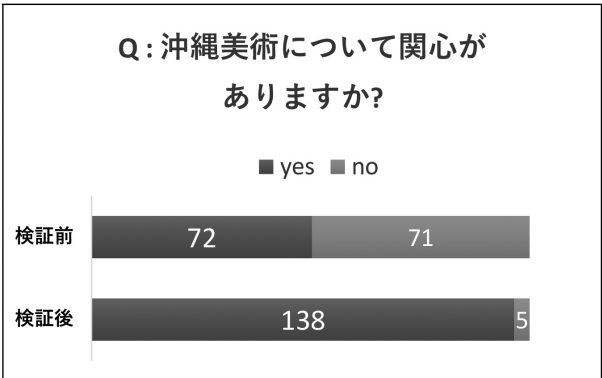


17. 開邦中学校でのニシムイ鑑賞授業

【事前アンケート】		N=143		yes	no
①「ニシムイ」について知っていますか		4	139		
②沖縄の美術について関心がありますか		72	71		
③あなたは美術館に行ったことがありますか		93	50		
④鑑賞の授業は好きですか		109	34		

【事後アンケート】		N=143		yes	no
⑤「ニシムイ」について関心が高まりましたか		138	5		
⑥沖縄の美術について関心が高まりましたか		138	5		
⑦美術館に行って鑑賞したいと思いましたか		130	13		
⑧今日の授業は楽しかったですか		139	4		

(表 1) 那覇市立神原中学校アンケート



開邦中学校・宜野座中学校の「事前学習ワークシート」¹⁸は、美術教師が独自に、授業のねらいが何であるのか、ニシムイ美術村で何を学ばせたいのかを考えて作成している。生徒の「振り返りシート」から「たくさんの人に沖縄の美術を知ってほしい。そのためにも自分たちが伝えていかなくてはいけない」「沖縄らしさを残し、新しい沖縄のあり方を広めていく」など地域の資源を知るとともに、地域に誇りを持ち始めていることがわかる。美術館から事前に「鑑賞サポートシート」を送付することで見学の参考資料として、または長期休暇や土日祝祭日の課題として活用した。

【生徒への設問→感想・意見】

- ニシムイ美術ではいくつものグループを形成し、次世代に大きな影響を与えた。これからの沖縄美術はどうなってほしいですか。

■沖縄美術をたくさんの人々に知ってほしいから、どんどん学んで伝えてほしい。画家たちの努力を無駄にしないように……

■沖縄らしさを残し、新しい沖縄のあり方を広めていくのを目指す。

■沖縄の伝統や文化をそのまま残していったほしい。ニシムイ村の人たちが一生懸命残したもののなので、次世代の人たちが受け継がなければいけないと思う。

神原中学校では、画家たちの名前と作品の紹介から、画家たちの対話が生まれやすい作品を班に1枚ずつ配り、鑑賞会を実施した。作品の見方や感じ方を深める機会となった。

学校名 那覇市立神原中学1年生

実施日 7月11日(木)

実施内容 ①終戦後の沖縄の美術史
②グループで作者・作品鑑賞
③鑑賞授業ワークシート

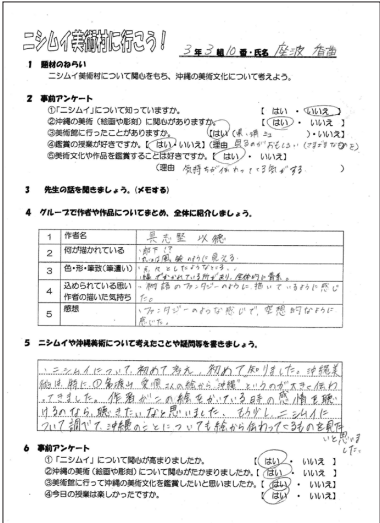
【生徒への設問→感想・意見】

- ニシムイや沖縄美術について考えたことや疑問等を書きましょう

■ニシムイについて初めて考え、初めて知りました。沖縄美術には、特に名渡山愛順さんの絵から『沖縄』というのが大きく伝わってきました。作者がこの絵を描いているときの感情を聴いてみたいなと思いました。もう少し、ニシムイについて調べて、沖縄の



18. 県立開邦中学校事前学習ワークシート



19. 那覇市立神原中学校鑑賞ワークシート



20. 那覇市立神原中学校でのニシムイ鑑賞授業

ことについても絵からも伝わっているものを見たいと思いました。

■ニシムイは首里城中心として、北にある森という意味があるとわかりました。ニシムイ美術村の10人の画家がいなければ沖縄の伝統的な建物や芸術が成り立たなかったかもしれないと思うと、やはり伝統を自分たちで守っていかないといけないと思いました。沖縄芸術について、もっと興味がわいた。

生徒の記述には、「作者がこの絵を描いているときの感情を聴けるのなら聴きたいと思った」など、作者との対話に広がっている。ニシムイ画家の1つの作品を長時間注視する生徒たちの姿を見て、「鑑賞サポートシート」の存在と生徒たちへの動機づけの大切さを痛感した。所蔵作品に対する生徒たちの関心が高まり、作品鑑賞を通して、沖縄の美術が親しみやすいものに一歩近づいたことは確かである。生徒の「振り返りワークシート」には、「本物の作品を見てみたい」という内容の記述が多く含まれていた。

「一度美術館に行ってみたいと思った」など、アンケートには、鑑賞を深めていく楽しさや、美術館への関心について記述されているものが少なくなかった。美術館来館前の「動機づけ」には有効な授業であった。

生徒のアンケートでは、事前学習での「ニシムイ」の認知度は低く、沖縄美術史に対する興味も半々であったが、事後の振り返りには、ほとんどの生徒が興味を示すといった大きな変化が見られた(表1)。そして当館の所蔵作品を教材化することは、美術館のコレクションについて知ってもらう確かな機会になったと考える。美術館からの「鑑賞サポートシート」²³を来館前の事前学習として全学年に配布した。長期休暇や土日祝祭日に活用してもらえるようにした。学校側は夏休みの課題として案内²⁴を美術教師が作成、配布した。

4-4. 美術館における鑑賞の実践

美術館鑑賞の利点として、以下の4点があげられる。利点をふまえ、中学生を招き美術館で鑑賞を行った。

- ニシムイ画家の作品を通して、当時の生活や社会背景を理解することができる、美術館ならではの貴重な現物をみることができる。
- ニシムイ画家の作品や人物像などについて、調べた成果を美術館で確認できる。
- 美術館でのボランティアとの作品鑑賞により、対話を通して見方、考え方を広げることができる。
- 美術館学芸員や関係者による解説でより深く学ぶことができる。



21. ニシムイ作家の作品で鑑賞



22. ニシムイ作家の作品を鑑賞



23. 鑑賞サポートシートの説明



24. 夏休み課題案内

学 校 名 国頭村立国頭中学校 1 年生
 来 館 日 1 月 24 日（木）10:00 ～ 12:00
 実施内容 ①鑑賞授業ワークシート
 ②ボランティアによる対話鑑賞

学 校 名 豊見城地区美術部（長嶺中・豊見城中）
 来 館 日 2 月 16 日（土）9:45 ～ 11:30
 実施内容 ①サポートシートによる鑑賞
 ②県立芸術大学卒業制作展

学 校 名 琉球大学附属中学校美術部
 来 館 日 2 月 17 日（日）9:45 ～ 11:30
 実施内容 ①サポートシートによる鑑賞
 ②県立芸術大学卒業制作展

- 沖縄の歴史と関わりのある作品を多く見ることができとても興味深かった。
- 芸術作品に囲まれ、不思議な感じがした。こんな絵を描いてみたいとか、様々な絵に挑戦したいなど、強く思った。
- 自分の考えと違った感じ方や物の見方が見れて面白かった。
 バックヤードの見学も大変興味深く、このプログラムは美術に興味を抱く人が増えると思う。続けてほしい。

今年度、夏休みの美術館は中学生の来館でにぎわった。団体で来館したあるクラスでは、作品と対面したときに歓声があがった。^{27,28}

「鑑賞サポートシート」による事前授業を受けているため、作品鑑賞を楽しみにしている生徒も多い。シートの記述を見ると、実物の作品から多くのことに気づいているのが分かる。画面の大きさに驚き、図版では再現されていない微妙な色使いや、図版ではつぶれてしまっている細部の描写に新たな発見をするなど、細かく鑑賞できたようだ。生徒の多くは、実際に作品と出会うことで素直に作品をみつめ、作品鑑賞の楽しさを実感してくれた。会場では細かな指導は行わなかったが、それぞれの力で作品の魅力を見いだすことができていた。

4-5. 教員向け講座の実施

美術館は毎年、鑑賞教育に関する教員講座も開催している。今年は「ニシムイ」教材の紹介として中学校教員に呼びかけた。生徒たちを連れてく



25. ボランティアによる対話鑑賞



26. 美術部の鑑賞サポートシート活用鑑賞



27. 美術部来館 鑑賞説明



28. 夏休み課題鑑賞

る前に、教員が美術館に親しんでもらい、展覧会の内容や絵の見方、感じ方を知ってもらう機会とした。

実施日 8月8日（木）13:30～15:00

場 所 沖縄県立博物館・美術館

沖縄県造形教育研究大会

実施内容 ①普及プログラム「ニシムイ」紹介

②実践事例発表4校

③コレクションギャラリー鑑賞会

参加者の声には、次のような記述があった。^{29,30}

■美術教師であるのに、「ニシムイ」について、正直わからなかった
ので、今日はとても良かった。鑑賞の授業の広がりを生徒た
ちが実感し、分かち合うことができる教材だと思いました。私
なりにアレンジして、生徒を「ニシムイ」の作家の絵と向き合
わせたいと思いました。

■教師自身が生徒に教える前に、さまざまな学校の外と関わりを
持つ必要があるなと思いました。

■ニシムイ資料もとても分かりやすく、教科書や資料集には、他
国などの有名な作品は詳しくのっており、生徒もふれることが
できていましたが、地元のニシムイ作品にふれる機会はなかつ
たので、今後積極的に活用していきたいと思います。

5. 研究のまとめ

美術館では、教科書にない「本物」と出会い、美術を学ぶ意義と楽しさ
に気づくことができる。さらに学校の授業計画に美術館での鑑賞教材を加
えることにより、「知識・技能」とどまらず「思考力・判断力・表現力」
を高め、対話による鑑賞会の言語活動によって、学びに向かう表現の場と
することができる。

美術館は「学校での学習の成果を実感として受け止められる場所」とな
ることと、「さらに学習を発展させることができる場所」であることを確
認し、本実践を通して、鑑賞活動の充実が図られ、学校と美術館を繋ぐ効
果があったと考える。



29. 教員向け講座



30. ニシムイ教材について話し合い

おわりに

子どもたちのやわらかい感性で作品を楽しむ姿に触れると、多くの児童・生徒に美術館での鑑賞を体験させてあげたいと改めて思う。やはり教科書では味わえない「本物」の作品の魅力に直に触れる体験が必要である。今後も、学校教育と美術館の連携・協働を継続し、より多くの子どもたちが地域の美術や美術文化との「本物」の出会いができるよう支援していきたい。

そして、美術館（学芸員）と学校（教師）の連携・協働による実践を通して、これからの美術教育の新しい可能性を探求していきたい。

31. 対話鑑賞とは

美術の歴史や技法、制作の背景などの知識に頼らずに、作品と向かい合った時に感じたことや想像したことなどを自分のことばで話す体験を通して作品に歩み寄っていく自由な鑑賞法のこと



32. 開邦中学校 授業の様子



33. 豊見城中学校 来館鑑賞



34. 国頭中学校 ボランティアによる対話鑑賞



35. 豊見城地区美術部 鑑賞プログラム

【資料編 1】パワーポイント教材の内容



教材シナリオの一部

P13 ●村を訪れる米軍関係者

アメリカ人と日本人、支配するものとされるもの、大きな隔たりを超えて交流をした。それはなぜか。両者のあいだには、アートがあったからだ。アートには、国境などない。いかなる言葉も必要ない。

1枚の絵があれば、それによって心を通わせることができる。

それこそが、アートの本質であり、すばらしきなのである。(『太陽の棘』より)

出典：原田マハ『太陽の棘』2015年、文藝春秋、p.41

P14 ●画家たちの思い

戦後の貧しい時代にアメリカ人に絵を売ったりしながらも 画家としての夢は捨てなかったのだ。

P27 ●「ニシムイ」の画家たちの功績

- ※琉球切手を作った
- ※慰霊の碑の設計・製作
- ※旗頭のデザイン・制作
- ※各地の獅子作り指導
- ※第二尚氏王統歴代の墓陵を守った。

P35 ●美術館で鑑賞しよう

何もなかった戦後の時代、画家たちは何を描いていたのだろうか？

画家の作品から当時の生活や時代背景を感じてみよう。

美術館に行ってニシムイ画家たちの思いを作品から感じてみよう！ そして展示を楽しんでみよう。

びじゅつむら

ニシムイ美術村って何？

終戦後の1948年、現在の郡山市首里の廣保町(ゆいれーる廣保駅の近く。)

に画家たちが集まって「ニシムイ美術村」をつくりました。「ニシムイ」は漢字で「北森」と書きます。首里 城の北(ニシ)側にあるという意味です。

その「ニシムイ美術村」の画家たちのもとに、たくさんのアメリカ人が訪れました。画家は彼らの絵(肖像画)を描いたり教えたりしながら、画家として、より良い絵を描こうと努力をかさね、次々すばらしい作品を生みだしていきました。

ニシムイ美術村の画家たちは、絵を描くだけでなく、切手やタバコのデザイン、新聞のさし絵などにも取り組んで、沖縄のために幅広く活躍しました。

ニシムイ美術村の画家たちから琉球大学の美術の先生になった人もたくさんいます。ニシムイの画家たちから絵を教わってもらって、影響をうけて次の世代を育てたたくさんのお画家たちも育ち、グループも形成していきました。

ニシムイ美術村は、沖縄美術復興・発展の拠点となりました。

[illegible]

年 組 番 氏名:

鑑賞ワークシート
沖縄美術「ニシムイ」 * ()に当てはまる語句を書きましよう

1. ニシムイとは(いつ頃・どこで始まった)

(1948)年、現在の那覇市首里(儀保)町に形成された共同体、
(美術)村のこと。

2. 戦後すぐに与えられた美術家たちの職業はなに?

終戦直後、沖縄民政府に(文化)部(芸術)課ができる。
収容所だった画家たち(美術技官)として雇われる。

3. ニシムイ村が出来るきっかけは?

1948年に政府の移転など文化部が(廃止)され、美術家達のあらかた活動拠点を探して、現在の那覇市首里(なはししゅり)儀保町、通称(ニシムイ)→(北森)にアドリエ兼住居を構えて移り住みました。生活のために助け合いながら一緒に生活をしようとあちこちが集まった。

4. 美術家たちと米軍人の関係

米軍人へ物品を売り生計を立てると言う事は美術家達の理想郷「ニシムイ」を支える重要な要素であった。
美術家たちは、依頼された(絵画)と(タバコ)交換する、いわゆる物々交換をしていた。この貰った物品を売って自分達の生活資金に替えていったのである。米軍人は仕事を依頼して報酬をくれる良いお客さんであった。

5. その後ニシムイ村はどうなっていったの?

世間への意見の対立、(大型台風)の被害、(大学教授)への転身、(道路工事)のための立ち退きなどでニシムイ村(1948年~1972年)24年の幕を閉じることになった。

6. ニシムイの画家たちの沖縄美術に与えた影響は?

ニシムイ画家によって次の沖縄の美術家たちが育ち、いくつものグループ形成を促した。ニシムイは沖縄の戦後美術の(復興)・(発展)に大きな役割を果たした。

7. 美術家の名前を書いてください

①ニシムイを作ろうと提案した人で美人画をよく描いていた。

【名派山愛蘭・などやまあいじゅん】

②画家・紅型作家でもあった。首里高校染織科設立に貢献 【末吉安久・すえよしあんきゅう】

③美術家・教育者で子どもたちに親しまれていた。

【具志堅以徳・けしけんいとく】

④ニシムイで唯一の日本画家、新聞小説の挿絵も描いた。

【金城安太郎・きんじょうやすたろう】

⑤書道を生業にした書画家であり、記者でもあった。沖縄美術家協会会長 【屋部憲・やぶけん】

⑥超現実主義的な絵を描いた。のち琉球大学美術工芸科教授となる。

【山元恵一・やまもとけいいち】

⑦明るく色鮮やかなフォルム(変形)した人体による作風を確立。 【大城皓也・おしろこうや】

⑧東京生まれの戦後沖縄美術界のリーダー的な存在

【安谷屋正義・あだにやまさよし】

⑨画家・彫刻家であり沖縄近代彫刻の基礎を築いた

【玉那覇正吉・たまなはせいきち】

⑩名護出身、緑を基調とした絵画で、生涯「緑」を描き続けた。

【安次嶺金正・あしめかねまさ】